

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦 2024年（令和6年）3月26日

一般財団法人 櫻田會
理事長 増田 勝彦 殿

研究者 成蹊大学法学部教授
平石 耕

第40回（2021年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

20世紀におけるデモクラシー理念の再検討:日英の事例を中心に
A Reappraisal of the ideal of Democracy in 20th century Britain and Japan

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

The purpose of this study is to re-examine the ideal of democracy in 20th century Britain and Japan.

In recent years, there have been strong arguments about the decline of liberal democracy in democratic countries, considering the rise of populism and its characteristic methods of government. This situation leads to the questions of why the ideal of democracy has been supported and how its essence and scope have been understood. This study aims to answer these questions by examining 20th century political thoughts.

The study, on the one hand, examines post-war Japanese political thoughts on democracy, nationalism, and pacifism, taking into account of the then-contemporary discussions on the Imperial Order, modern civilization, education, and human nature. Various intellectuals are examined, but mainly the study focuses on the political and social thoughts of Shigeru Nambara (1889-1974), Masao Maruyama (1914-1996), and Kan-ichi Fukuda (1923-2007).

On the other hand, the study reappraises the political and social thought of A.D. Lindsay (1879-1952), whose democratic ideal was paid attention to by Japanese thinkers like Maruyama and Fukuda. The study extends to Karl Mannheim (1893-1947) and the members of Moot, a group of Christian intellectuals such as T.S. Eliot (1888-1965), considering Lindsay's acquaintance with these people in 1940's. This time, the study especially focuses on Lindsay's idea on higher education and its relationship with his idea of democracy.

※研究の目的・研究方法・意義（和文 600 字以内）

本研究は、申請者の専門である近現代英国政治思想史を基盤としつつ、日本を中心とした他地域での事例をも視野に入れて、20世紀におけるデモクラシー論の射程を再検討する。

ヤシャ・モンクやヤン＝ヴェルナー・ミュラーの近著にも示されているように、近年、リベラル・デ

モクラシーの危機が大きく論じられている。冷戦終焉を通じたリベラル・デモクラシーの勝利という安易な「歴史の終焉」観は、ポピュリズムの抬頭やコロナ禍への対応の実効性などをめぐって、見直しを迫られている。こうした状況を踏まえ、民主主義の可能性を探るために、本研究は次の二点を焦点として、20 世紀に論じられた民主主義の理念を再考察する。

一つは、民主主義の理念が(1)産業化・相互依存化・組織化が進む近現代の社会において「人間の条件」とどのように結びつけられて論じられたのか、また、(2)個人と共同体・社会・国家とのあいだのあるべき関係とどのように結びつけられたのかを検討することである。

もう一つは、上記の問いを念頭に、20 世紀の英国の政治思想史と並行して戦後日本における民主主義論の射程を検討することである。

※研究経過と結果の概要 (以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる)

コロナ禍により当初予定していた英国での資料調査が困難となったこともあり、研究は、戦後日本の思想史の考察から始めた。そこには、2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻、7 月の安倍元首相銃撃事件という二つの事件が、戦後日本を支えてきたはずの政治理念の再考を強く促した事情もあった。

研究は二つの方向から進めた。一つには、最近の内外のポピュリズム研究や近年の日本政治に関する二次文献・資料を参照し、最近のポピュリズムにみられるとされる反リベラル・デモクラシー的傾向と、ここ 10 年ほどの日本政治の特徴とを比較した。例えば、近年のポピュリスティック統治の特徴として、①「真の人民」と「人民の敵」との分断、②報道・学問の自由への介入、③官僚の非党派性への介入、④司法の独立への介入などがあげられるが、これらの特徴と最近の日本政治の特徴との異同を考察した。

こうした研究を背景に据えながら、研究のもう一つの方向においては、戦後日本におけるデモクラシー、ナショナリズム、平和主義をめぐる議論を、天皇制論、文明論、市民社会論、教育論、人間論と絡めながら検討した。この研究では多岐にわたる思想家・知識人を検討の対象としたが、一つの軸としたのは、南原繁、丸山眞男、福田歓一の系譜である。そこから確認されたのは、彼らを中心とした一群の思想家・知識人は、戦前の天皇制を単なる政治体制ではなく道徳規範でもあったと理解した上で、その天皇制が神秘化された結果もたらされた悲劇をくり返さないために、人間の尊厳を基点に据えて思想を展開したことである。南原も関係した(旧)教育基本法での「人間性の完成」の強調、丸山のいう「永久革命」としてのデモクラシー、福田による近代の政治思想としての社会契約説への注目は、いずれもこの一例と考えることができる。

また、この研究では、福田における主権国家としての国民国家への注目が、彼の平和論と結びついており、そうした議論が恐らく坂本義和の議論と密接に関連することも確認した。さらに、教育論に関して、丸山眞男・福田歓一と堀尾輝久との関連から戦後教育学の一つの方向性を確認することもできた。

以上の戦後日本の思想史の検討に対して、英国思想史では、『デモクラシーの本質』で知られる A・D・リンゼイ(リンジー)の研究を中心に進めた。一つには、英国時代のカール・マンハイムの研究を進めている山田竜作教授(創価大学)と、日本政治学会の分科会(2023 年度日本政治学会公募企画『『移動する人々』をめぐる政治学』)や日本政治学会分野別研究会「民主主義と文化」での活動を通じて情報を交換し合い、特に 1930 年代から 40 年代にかけての Moot と呼ばれるキリスト教系知識人のサークルとマンハイムやリンゼイとの関係を検討した。また、2023 年度日本イギリス哲学会のシンポジウムでの報告を念頭に、リンゼイの教育論・学問論を検討し、それが 19 世紀から 20 世紀にかけてのイギリスの高等教育改革の流れの中でどのような特徴を持っているかを考察した。その上で、彼の教育論が 19 世紀を通じた「現代産業文明」への変化、そしてそれと並行して見られる大衆社会化に対応するためのものだったことを確認し、そうした教育論が彼の民主主義の理念と深く結びついていることを確認した。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

平石耕「戦後民主主義」(武蔵野市寄附講座「民主主義について考えるための14講」、第4回)
(2023年10月19日)

平石耕「PPE 構想とA・D・リンゼイにおける学知の総合」(第48回日本イギリス哲学会、シンポジウムⅡ「PPEという学問領域の可能性——イギリス哲学の総合性の現代的翻案」)(2024年3月24日)

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。